第35回
全国読書作文コンクール
優秀作品集

小学生5点・中学生4点

公益社団法人全国学習塾協会

令和七年度　第三十五回　全国読書作文コンクール

小学生の部・大賞

自分らしく、あなたらしく

副田　橙子（小六）

私がこの本を読んだ理由は、普段考えないことを考えてみたいと思ったからです。私はこれまで、「障がい者」について学ぶことはあっても「きょうだい児」について知る機会はなく、また聞いたことすらありませんでした。今回は普段考えないこと、聞くことのない言葉を深く知るチャンスだと思い読むことにしました。

私が読んだ「自分らしく、あなたらしく」は障がい者の兄弟や姉妹を持つ「きょうだい児」が何に悩み何を目指してきたのか、実体験をもとに分かりやすく書かれていました。

この本を読み心に残ったのは、藤木和子さんの「私だけ聞こえてごめんね」という思いでした。藤木さんの体験では弟の聴覚障害について話されていました。他にも、難病の妹を持つ中山さん、ダウン症の弟を持つ志村さんもいましたが私の心に一番強く残ったのは藤木さんのエピソードでした。きっとそれは自分の暮らしに一番近い状況だからだと思います。私の家族は誰一人として障害を持っていません。正直に言うと、障がい者の方とこれまでかかわる機会のない中で、いきなり「難病の妹ができたら」「ダウン症の弟ができたら」と想像するのは難しいです。ですが藤木さんの弟が持つ障害は聴覚でした。聴覚障害については私も学んだことがあります。一番自分と近い状況にいる藤木さんの生活の中での「私だけ聞こえてごめんね」という思いには、とても心が痛みました。皆さんは家でテレビを見ることはありますか？もちろん私はあります。藤木さんも家でテレビを見ることがありました。ですが藤木さんの幼少期にはまだ「字幕」がありませんでした。聴覚に障害がある人がテレビを見ると何を話しているのかはわからずただ目の前に無音の映像が流れているだけです。そんな弟を横に音声のついたテレビをみて、笑うことのできる藤木さんは「申し訳ない」と感じてしまったのです。もし私に聴覚に障害のある弟ができても、横でテレビをつけ、笑いながら見ることはできないと思います。そして私には幼少期にテレビを見るだけで申し訳ないと思ってしまう気持ちになったことがないので、今の私より小さな時から心の中で謝る藤木さんにとても優しいと思うと同時に少し切ない気持ちにもなってしまいました。

私はこの本を読んで普段学校で教わる「障がい者」だけでなく後ろで支え、悩み、乗り越えていく「きょうだい児」について知ることができ

ました。初めに「自分らしく、あなたらしく」という題名を見たとき、そして読み終わった後に「自分らしく、あなたらしく」という題名を見た時では、また違う悲しさ、温かさを感じることができました。これからは目に見えるものだけでなくそれを支えている人、一緒に乗り越えていく人についても考えてみたいです。

対象図書名　自分らしく、あなたらしく

大賞へ、審査員のひとこと

率直な感想をこれほど明確に言葉にできることに、まず驚かされました。読書を通じて「知らなかったことを知る」喜びを描くだけでなく、その知識が自己や世界の見え方を大きく変えていく過程を、小学生とは思えないほど自然に、そして力強く表現しています。

特に、障害のある人だけでなく、その家族にまで思いを寄せ、その中にある温かさと悲しさを同時に感じ取っている点には、審査員一同、胸を打たれました。この作品を読むことで、私たち自身もまた『知ることの意味』を改めて考えさせられました。

自分自身の変化を素直に言語化し、完成度の高い作文に仕上げた筆力には、今後さらに大きな飛躍を遂げていく可能性を強く感じます。未来への期待を込めて、心からの称賛を贈りたいと思います。

受賞者のひとこと

私は、昨年、初めてこのコンクールに応募しました。ですがその時には賞など足元にも及ばず、悔しい思いをしたことを覚えています。今年、まさか賞を取るとは思っていなかった私が大賞を受賞できたと聞いたとき、まさに「夢のよう」という言葉がぴったりで、何度も「本当に私？」「間違っていない？」と確認してしまいました。実際に賞をとったと実感できたのは次の日です。今、こうやって「受賞者の声」を書いているときも、終始喜びにあふれています。また、大賞をとることで、私の国語が好きだという気持ち、本が好きだという気持ちに今まで以上の誇りを持つこともできました。改めまして、背中を押してくださった塾の先生方、静かに見守ってくださった両親、とても心に響く本を書いてくださった高橋うらら様、審査をしてくださった審査員の皆様、本当にありがとうございました。

小学生低学年の部・最優秀賞（小二）

ぼくは何星人？

恒成　春大

「わかる、わかる。ぼくもキチント星からきたのかもしれない。」そう思いながら、どんどん本を読みすすめていった。

ぼくは学校からかえってくるとすぐにえんぴつをとぐ。そしてふでばこの右から左にかけて長いえんぴつからじゅんばんにならべていく。マカロニグラタンを食べるときにつかったそのフォー

クでキウイフルーツをさして食べることはしない。べつのフォークをもってきて食べる。それらはぼくの中では当たり前でごく自ぜんなこと。

でもあっくんのように今とはちがうかんきょうにとびこむことはにが手。新しい学校、ましてや新しい家でくらすなんてそうぞうすることすらむずかしい。ぼくはやきゅうチームに入っていて、れんしゅう日を毎回心まちにしている。そのくらい大すきなやきゅうだけれど、ちがうチームにいせきするとなるとあっくんの言う「どこでも同じ」という気持ちにはなれないと思う。ということは、ぼくはキチント星出しんではないのかもしれない。

ハイキングキャンプで出会った五年生三人組のように、自分とちがう考えをもつ人をぼくはからかったりはしない。あの五年生三人組は自分たちの考えや行動が正しいと思いこんでいる。そしてそれを人におしつけようとしている。それこそがまちがいだ。三人組とぼくはちがう星の出しんのようだ。

あっくんが引っこしてきたばかりのとき、千歌のお父さんが人それぞれいろいろなクセがあると話していた。「ふつう」のきじゅんは人によってちがうということも。

ぼくの姉も「人それぞれちがっていていいんだよ。人と同じじゃなくていいの。みんなと同じってことで安心する子もいるけれど、むりして人に合わせることがつらい子だっているよ。集団で生活する中で合わせなくてはいけない場面もあるけどね。」と言っていた。

お姉ちゃん、いいこと言うねってぼくは心の中で思った。いいことだと思ったということは、姉とぼくの考え方は同じだということだから同じ星の出しんかもしれない、といっしゅん思ったけれど、ぼくは姉のように人なつっこくはない。やはりちがう星かな。

生まれたときからいっしょにくらしてきた姉弟でもちがうところがたくさんあるのだから、学校の友だちとも、じゅくの友だちとも、広いせかいのだれとも、まったく同じ人なんていないんじゃないかと思う。

そのことをぼくはさびしいとは思わない。いろんな星からやってきた星人と出会って、ちがうところを見つけておどろいたり、わらったり、ときどきぶつかり合ったりしたい。そうぞうするとわくわくする。ぼくのにが手なかんきょうをかえるということもこくふくできそうな気がする。あっくんがブドウの食べ方をかえてみたように、ぼくもちがう星のやり方にちょうせんしながら生きていきたい。

対象図書名　うちのキチント星人

受賞者のひとこと

ぼくの読書作文を読んでいただいてありがとうございます。

昨年につづいてさいゆうしゅうしょうという大きなしょうをとることができて信じられない気持ちです。とてもうれしいです。

夏休みがくると新しい本との出会いがあり、自分の考えを自由に書くことができるのでわくわくします。ぼくはまず、本を読んだら家族に感想を

話します。そうやって考えを整理してから作文を書いています。

これからもたくさんの本を読んで、頭と心を動かして、いろいろな見方や考え方ができる人になりたいです。

小学生の部・最優秀賞（小四）

愛すべきキチント星人

副島　綾乃

タイトルをみて、「どんな内容か確かめてみたい。」そんな衝動にかられてこの本を手に取った。私はきちんとという言葉が正直好きではない。きちんとしなさい、きちんと書きなさい、きちんと片づけなさい・・・大人が大好きなこの言葉。聞いただけでうんざりしてしまう。きちんとすることはそんなにすばらしいのか？と思う。キチント星人て一体なんなんだ？私は興味しんしんで読み始めた。この本に出てくるあっくんは超けっぺきで何でもかんでもきちんとやらないと気のすまない性格だ。主人公のちかがつけたあだ名がキチント星人だ。ブドウをナイフで食べようとしたり魚は小さな骨まで完全に除去して食べる。それを知って私は思った。あっくんはきちんとを通りこして変人だ。ふつうの感覚の人は友達になれないだろう。それに対して、ちかはあっくんと正反対の性格だ。細かいことを気にせず、勘だけで生きているオオザッパ星人だ。私はどちらかというとちかと同じ大ざっぱなタイプだ。同じオオザッパ星人として完全にちかの気持ちに共感してしまった。あっくんの行動にふりまわされるのを見て、たいへんだなあと思った。キチント星人とオオザッパ星人は食べ方からせんたくもののたたみ方まで違う。みんなでおすしを食べるシーンで、ちかはあっくんに食べ方を教えてあげようとしたが、余計なお世話と断られてしまう。だけど、ちかがソファでせんたくものをたたんでいたら、汚いからソファでやらないでと言われてしまう。まるで夫婦げんかみたいだ。お互いやり方を否定されていやな気持ちになっているのだ。キチント星人にもオオザッパ星人にもそれぞれ自分の気に入ったやり方がある。自分が正しいと思っているのに相手にとっては正しくないこともあるから、一方的におしつけるのはよくないと思う。

よく考えると私のまわりにもいろんな人たちがいる。あっくんみたいにきちんとした友だちもいれば、ちかや私と同じおおざっぱな友だちもいる。ママはせっかちだけどパパはのんびりしている。じいちゃんはひょうきんで、ばあちゃんはポジティブだ。みんなそれぞれ違うタイプの星人だ。私の友だちのキチント星人はあっくんみたいに真面目で努力家だ。オオザッパ星人にはないところがたくさんある。でもオオザッパ星人にもキチント星人にはないところがある。おおらかで細かいことを気にしない。くよくよしないのがオオザッパ星人のいいところだと思う。いろんなタイプがいるけど、みんな私にとって大切な人たちだ。それぞれにいいところがあり悪いところがあって、お互いの弱点を支えあっている愛すべき星人たちだ。あっくんのいうように同じタイプばかりじゃつまらない。いろんな人がいるから人間は魅力的でおもしろいのだと思う。

対象図書名　うちのキチント星人

受賞者のひとこと

私が書いた読書感想文が最優秀賞に選ばれたと聞いてとてもびっくりしました。文の構成から細かいところまで、何度も書き直して完成させました。作品を選んでもらってとてもうれしかったです。自分がなんとなく感じていることを言葉にしてみると考えがまとまってすっきりとします。そこが作文の好きなところです。今後も、もっと作文の力をつけていきたいです。選んでいただいた審査員のみなさん、そしていつもお世話になっている塾の先生方、本当にありがとうございました。

小学生の部・最優秀賞（小五）

「すこしの勇気と、わたしの特権」

岸川　結璃

一学期最初のクラス替えの日、私は暗い気持ちでひとり家に帰った。いつも一緒にいる三人の友達はみんな同じクラス。私だけが違うクラスになったからだ。同じクラスになって喜んでいる友達を見て胸がぎゅっと苦しくなった。

この本に出てくる睦月も、友達に仲間外れにされてひとりぼっちになってしまう。友達に理由をたずねても、「自分で考えなよ」と突き放される。ひとりぼっちの気持ちや、学校に行くのが憂うつなところが、その時の私と重なった。睦月が心の中でたくさんのことを考え、悩みながら日々を過ごす姿に、「そうそう、そんな気持ちになるよね」と共感しながら読み進めた。

しばらくすると、新しいクラスは案外居心地の良いことが分かった。担任の先生は面白いし、何より私は「気の合う友達」を見つけた。一緒にいると優しい気持ちになれる大切な友達。ところがある日、クラスメイトからその友達の悪口を聞いた。「あの子、人使いが荒いから、気を付けて」なんでそんなこと言うのだろう。私の胸はまた痛くなった。

――うわさ話は、思わぬところで広まって、形を変えながら人を傷つける凶器となる――私は、教科書で読んだ話を思い出した。この本でも、睦月が言った友達への何気ない一言が、うわさ話になってみんなに伝わり、睦月自身を苦しめることになる。

この本を読んで学んだことが二つある。

一つ目は、「人の悪口を言ってはいけない」ということ。一度悪口を言ってしまうと、「ごめんね。」と謝っても、関係は元には戻らない。他人のうわさ話だけで判断しないで、まずは自分から話しかけて、その人を知ろうとする気持ちを大切にしようと思う。

二つ目は、「子どもはいっぱい失敗して、いっぱい間違っていい」ということ。私は間違うのが怖くて他の人に聞けないことがたくさんある。例えば友達の話。学校の先生に理不尽なことで怒られた友達。次の日学校を休んでしまったのに、話を聞いてあげることができなかった。その子が話してくれなかったらどうしよう、という気持ちが優先し、「大丈夫？」という一言がかけられなかった。私の後悔は今でもずっと

続いている。でも私には「間違っていい」という子どもの特権があると分かった。だから勇気を出して一歩踏み出してみようと思う。

この本は、ひとりぼっちの私の心にそっと寄り添ってくれた。うまくいかない時、さびしい気持ちになった時は、自分の思いを大切にしながら、勇気をもって成長していきたい。だって私は睦月たちと同じ、子どもの特権を持っているのだから。二学期が始まったらすぐに、友達に話しかけてみよう。

「あの時は、声かけられなくてごめんね。もう大丈夫？」

対象図書名　あたしデイズ

受賞者のひとこと

「受賞した」と聞いたときは、理解するまでに少し時間がかかりましたが、だんだん実感が湧いてきて、驚きと喜びで胸がいっぱいになりました。

私は、自分の思いをすぐに言葉にすることが苦手です。でも文章にすると整理され、言いたいことが少しずつ見えてくるのです。

本は、私を理解するきっかけとなり、たくさんの気づきを教えてくれる私にとって欠かせないものです。

これからも読書を通して自分と向き合い、表現を豊かなものにしていきたいです。

最後に、このような賞をいただいたことに心から感謝いたします。ありがとうございました。

小学生の部・最優秀賞（小六）

いまがいいと思える日々を

渡邊　詩大

生きていく中で嫌な思いをしたり、させたりしたことがないという人はいるのだろうか。振り返ると、十一歳の僕もすぐ思い出せるくらい嫌な思いをしたことがあるし、させたことがある。また、身近な友達や家族を思い浮かべても、そういった経験をしているところを何度も見たことがある。

孝太郎は事故で記憶を失うまで、家族や友達に対して傲慢、高慢、尊大で俺様と思われる態度で接し、周りに嫌な思いをさせていた。そして、それが原因で自分も嫌な思いをし、記憶を失うほどの大事故を起こした。

僕の周りにも、孝太郎のように自己中心的な言動をする友達がいる。人のミスをひたすら責めたり、傷付くような言葉を投げつける姿を見ると、なんでそんなふうに言うんだろうと悲しくなる。そして、そういった関わりが原因で孤立している姿を見ると、仕方ないと思う反面、かわ

いそうだと思って放っておけない気持ちが湧いてくる。

僕自身のことを思い返すと、何気なく言った言葉が受け取る相手にとって強く聞こえ、嫌な気持ちにさせてしまったことがあった。そして、後にその相手が僕の悪口を紙に書いていたことを知り、僕も嫌な気持ちになった。正直思い出すと今でもモヤモヤする。

「人間に初期化なんて都合のいい機能はついてないよ。」カンナが孝太郎に言ったこの言葉はとても印象的で、僕の心にすっと入ってきた。孝太郎と周りの人も、僕の友達も、僕も、嫌な気持ちにさせたこと、なったことをなかったことにはできない。簡単に初期化して、なかったことにできるとしたら、想像しただけで僕は怒りが込み上げてくる。

時に、見ず知らずの人との間でも嫌な気持ちになる出来事が起こることもある。しかし、身近な人の方が関わりが深い分、嫌な気持ちを感じることが多く、時間が経ってもその気持ちを消化できないことが多いと感じる。嫌な気持ちにさせないこと、ならないことができたらいいが、突発的な言動、その時々の感情、受け取る側の思いを考えると完全になくすことは難しいのかもしれない。

孝太郎は、記憶が戻らないままでも相手の様子を伺うことで周りの人と再び関係を築くことができた。僕の友達も、僕も、過去を振り返り気をつけることで、周りとの絆を深めることができている。「いまがいいほうがいい」与志郎の言葉は、過去をなかったことにできない孝太郎や僕の心を温かくしてくれた。

これからもきっと嫌な気持ちにさせてしまうこと、なることはあると思う。自分が悪いと思った時には、素直に謝り、言動を改めること、関わりが難しい時には距離を取って見つめ直すことを大切にしたい。そして、相手への思いやりと自分の気持ちを考えた関わりをすることで、お互いが「いまがいいほうがいい」と思える日々を積み重ねていきたい。

対象図書名　キオクがない！

受賞者のひとこと

小学校最後の年に最優秀賞をいただくことができ、とても嬉しいです。読書作文コンクールへの参加を通して、新しい本と出合い、読み込み、自分の言葉で表現することは、大変ながらも達成感があり、毎年自分自身の成長を感じることができるので、今年も頑張って取り組みました。名誉ある賞をいただけたことを励みに、これからもたくさんの本を読み、考えたり表現する力を伸ばしていきたいです。作品を読み、評価していただいた先生方、本当にありがとうございました。

中学生の部・大賞

白紙の未来に描くもの

小川　和輝（中三）

「もしも」という言葉は、希望でもあり、呪いでもある。

ふと過去の選択を思い返すとき、「もしあのとき違う道を選んでいたら」と考えることがある。未来の可能性に胸を躍らせる一方で、今の自分への不満や後悔が押し寄せ、胸の奥底が痛みを感じることがある。

この物語は、香奈多と瑚子、二人の出会いから始まる。二人は秘密の場所で出会い、それぞれが抱える孤独や夢、そして現実の断片が少しずつ重なり合っていく。二人の心は、まだ言葉にできない想いを共有しながら、ゆっくりと結びついていった。

物語の中で瑚子が話す、不思議な黒猫ドコカの話は、二人の間に芽生える友情と、広がる想像の世界を象徴しているように感じられた。ドコカはまるで、私たちの心の中に潜む「もしも」を映し出す鏡のようだ。

私にも忘れられない「もしも」がある。それは、学校生活での些細なすれ違いから、大切な友達との間にできた距離だ。あのとき、勇気を出して「ごめんね」と素直に伝えられていれば、きっと違う未来が待っていたのだろう。今も時折、鏡の中にもう一人の自分がいるように感じる。その「もしも」の私が、友達と笑い合っている光景を想像し、胸が締めつけられる。けれど、その「もしも」を思い描く瞬間は、同時に未来への小さな希望でもあった。次に出会う友達や、「もしも」を想像することで、少しずつ自分を前向きに変えていけるのだ。

この作品は、ただのファンタジーではない。私たちが誰もが抱える「もしも」の気持ちに寄り添いながら、現実と向き合う勇気を静かに教えてくれる。物語の中で二人が見つけた宝物は、形のあるものではなく、希望や友情、そして自分自身を大切にする心だと私は感じた。

私はこれまで、空想を「現実逃避」だと思っていた。現実がうまくいかない時に、「もしもこうだったら」と考えることは、ただの弱さで、意味のないことだと思い込んでいた。でも、この物語に触れて、想像力とは「新しい自分をつくる力」であると気づかされた。夢を見ること、もしもを思い描くこと、それは逃げるためではなく、前へ進むための大切な力であると。

誰にだって、後悔したことの一つや二つはあると思う。私にも後悔した出来事がある。あのとき、あんなことを言わなければよかった。もっと素直になれたら、きっと違う未来があったはず。でも、「もしも」の世界があるとしたら、そこにはもう一人の私がいて、別の選択をして、別の人生を歩んでいる。そんなことを想像すると、不思議と心が軽くなった。

「もしも」の自分と向き合うことで、私は少しだけ変われた気がする。現実は一つしかなくても、心の中にはいくつもの可能性が広がっている。過去は変えられないけれど、未来はまだ白紙のページだ。だからこそ、どんなに迷い悩んでも、今の自分の選んだ道は間違いではないと信じて歩いていきたい。人生は分かれ道の連続で、その先にどんな景色が待っているかはわからない。けれども、自分の足で選び取った道だか

らこそ、たとえ険しくても進む意味があるのだと思う。

それでも、私は時に立ち止まり、不安や後悔にとらわれるだろう。そんなとき、心の中にいる「ｉｆの私」が、きっとそっと背中を押してくれるはずだ。過去に思い描いたもしもの姿や、選ばなかったもう一つの未来があるからこそ、今を大切に生きようと決意できるのだ。これからも私は、何度も迷い、考え、また歩き出すことになるだろう。そのたびに「ｉｆの私」と対話しながら、自分なりの答えを見つけたい。

「もしも」という言葉は、不安を呼ぶ言葉でもあるが、同時に未来を描くための希望の種でもある。その小さな種を大切に育て、少しずつ花を咲かせていくように、自分の物語を紡いでいきたい。

この作品を読み終えた今、私は「白紙の未来に描くもの」という言葉を心に刻んでいる。人生は誰にも見えない地図を手に進む旅のようなものだ。その地図にどんな色を描き、どんな形を刻んでいくのかは、自分次第だ。迷い悩みながらも、自分の選んだ道を信じて進むことこそが、私にとっての「本当の物語」なのだと強く感じた。

対象図書名　かなたのｉｆ

大賞へ、審査員のひとこと

現実と空想の境界が揺らぐ独自の構成は、読者を迷わせる難しさを持ちながらも、その分だけ深い余韻を残します。審査員としても、言葉を探しながら語らざるを得ない―そんな稀有な作品でした。

「もしも」という切り口を通じて結論を急がず、心に生まれた揺れや葛藤を丁寧に描き出した姿勢は、まさに成熟した読書体験そのものです。

自分の中で整理しきれない思いを、読み手に届く文章に練り上げていく努力と工夫には、大きな可能性を感じました。中学生らしい感受性と同時に、批評性を備えた文章力に、強い期待を抱かせる作品です。

受賞者のひとこと

読み終えて、心の中にある〝もしも〟の自分と向き合うことは、痛みを思い出すだけでなく、前に進む力にもなると感じました。私も友達とのすれ違いを思い出しましたが、この本のおかげで、後悔よりもこれからを大切にしようと思えました。そして、この感想文が受賞したことで、自分の思いが言葉を通して誰かに届いたのだと実感でき、とても嬉しかったです。これからも、作品に触れて感じたことを自分の言葉で表現し、迷いや後悔に負けずに未来へと進んでいきたいと思います。

中学生の部・最優秀賞（中一）

寄り添える存在へ

高旗　晏名

きょうだい児とは、障がいのある子どもの兄弟姉妹のことです。私は、この言葉を以前から知っていましたがその生活や気持ちについて深く考えたことはあり

ませんでした。だからこそ、この本で描かれる家族の姿はとても新鮮で、そして衝撃的でした。

私は普段、家族と仲良く過ごしています。夏休みには高校のオープンスクールに四回以上通い、イングリッシュキャンプに二泊三日で泊まり楽しく過ごします。困ったことがあっても、両親や姉妹がすぐ助けてくれるので「家族の支えがあるのは当たり前」だと思っていました。しかし、この本に出てくる家族は、日常の中にたくさんの困難がありました。

物語に出てくる、主人公穂乃果さんには、口に出せない悩みがありました。それは、妹の結衣花さんは難病で、長い距離が歩けない、車椅子を使って移動する。疲れると体調をくずしてしまうなどということで家族四人は出かけても途中で戻らないといけません。

遠くまで行くときは、いつも、穂乃果さんとお父さんの二人だけで行くのです。そのことに、穂乃果さんは、家族四人でいろんな所に行きたいけれどお母さんとお父さんを困らせてはいけないと、おさな心にそう思い、ずっとがまんしていました。

遊びや旅行の計画も、きょうだい児や家族全員の状況を考えながら立てなければならず、時には、あきらめなければならないこともあります。その現実を知ったとき、私は自分の環境がどれほど恵まれているかを、初めて深く実感しました。

物語の中で家族は周りの人たちからのサポートを受けながら生活しています。最初は人に頼ることをためらったり、自分たちだけで頑張ろうとしたりする場面もありました。でも、助けを求めることで、心の負担が少しずつ軽くなり、笑顔も増えていきます。

その文章を読んで、以前、保育園のボランティア先で出会ったお母さんの言葉を思い出しました。「誰かに頼ることは甘えじゃないのよ。」その言葉は当時も心に残りましたが、この本を読んで改めてその意味の深さを感じました。

私は、将来、保育士になりたいと思っています。保育園でボランティア活動に参加し、いろいろな子どもたちと関ってきました。その中には、障がいのある子も、きょうだい児の子もいました。

みんな明るく振る舞っていましたが、時々ふっとさびしそうな表情を見せることがあります。その理由をこの本を通して少し理解できた気がします。本人だけでなく、その家族全員が日々さまざまな思いを抱えて暮らしているのです。

この本から学んだのは、周囲の思いやりとつながりの力です。困っている人に声をかけること、小さな手助けをすることは、誰にでもできます。でも、その一歩がなかなか踏み出せないことがあります。

物語の登場人物たちは、勇気を出して助けを求め、また助けることで関係を深めて行きました。その姿は、私の理想の保育士像と重なります。

保育士は、子どもたちと向き合うだけでなく保護者や家族の気持ちに寄り添う必要があります。特にきょうだい児や障がいのある子どもを育てる家庭では、保育士が安心できる存在であることがとても大切です。

私は、この本を読んだことで自分が将来なりたい保育士のイメージがはっきりしました。子ども一人ひとりが「自分らしく」いられるよう、そっと背中を押せるような人になりたいです。そして、その家族もまた「あなたらしく」いられるよう支えられる人でありたいです。

読み終えて、私は自分の家族とこの本の家族を比べました。もちろん環境や状況も違いますが家族の形に「正解」はないと思います。それぞれの悩みを抱えながらも、互いを思いやって生きていることに変わりはありません。ただ、その中で必要なのは「一人で抱えこまないこと」だと強く感じました。

この本を読んだ経験は、私の中で大切な財産になりました。これからもボランティアを続けながら、いろいろな家庭や子どもたちの声に耳を傾けたいです。そして、保育士になったとき、この本で感じた思いやりと勇気を忘れずに、子どもと家族に寄り添える存在になりたいと思います。

対象図書名　自分らしく、あなたらしく

受賞者のひとこと

私の作文を選んでくださった先生や審査員の方々に感謝します。本当に驚きましたし、とてもうれしかったです。この本に出会って、家族の形や思いやりについて深く考えることができました。また家族の中で我慢したり、悩んだり、様々な事情を抱えている人がいるということも知りました。特に印象に残っていることは、主人公が勇気を出して助けを求め、それに対して周囲の人々がサポートしている場面です。この本を読んだおかげで、困っている人に寄り添い、勇気を与えることができる保育士になりたいという夢が決まりました。

これから将来に向けて色々な困難があると思いますが、この本を胸に刻んで夢を叶えられるように頑張りたいと思います。本当にありがとうございました。

中学生の部・最優秀賞（中二）

自分を再構築

佐藤　来実

日々の積み重ねで、自分という人間が出来上がっていく。そんな当たり前のことを、孝太郎の記憶喪失を通して改めて考えさせられた。いいことも悪いことも含め、過去のすべての出来事や記憶がその人を作っていく。その記憶を失ってしまったら、まるで根無し草のようなものだ。アイデンティティを失った人間ということになる。自分がどんな人間かも分からずに生きるというのは、どんなに不安なことだろう。恐怖にさえ思えてくる。困ることだらけ、分からないことだらけで、私なら生きた心地がしない。こんな心理状態で暮らすなんて想像しただけで気が遠くなる。

孝太郎の小学校のアルバムには、たくさんの友達に囲まれ楽しそうに笑っている自分がいた。どの写真も自分が中心にいた。みんなの人気者だったと分かる。だが、記憶をなくした孝太郎に対して、家族の対応も明らかにぎこちない。「今のお兄ちゃんがいい。」と言う弟の言葉も、

裏を返せば以前はいい兄ではなかったということになる。腫れ物にさわるような両親の態度はずっと気になっていた。単純に事故に遭った息子をいたわるというのとは違う。踏み込めない、いや踏み込んではいけない何かがあると思わせた。表面上では、家族に優しく迎えられ、クラスのみんなともうまくやっているように見えていただけに、孝太郎の気持ちは揺れ動いていたに違いない。

自分とは何者なのかを問い直さなければならない。人間関係も再構築せざるを得ない。到底ひとりでは無理だ。私は常に周りに気を遣いながら学校生活を送っている。そうして何とか今の人間関係を保てていると言えるので、孝太郎の苦悩は容易に想像できる。

「初期化」という都合の良い機能など人間にはない。この言葉は、帳消しにしたくなるような過去があったと暗示している。人は自分が意図せず誰かを傷つけてしまうことがある。生きていて今まで誰も傷付けたことがないと言い切れる人は果たしているのだろうか。傷つけた方は無自覚でも、傷付けられた方の痛みは根深く残っているはずだ。

事故で記憶がなくなったからといって、今までしてきたことは当然、帳消しにはならない。特に、誰かを傷つけたことは……。記憶が戻ることが自分にとって良いことなのか。孝太郎の心の葛藤が何度も伝わってきた。

古賀という男子生徒が、以前の孝太郎をひと言で言うなら「俺様」タイプだと言った。そのひと言は、明らかに過去の孝太郎を象徴している。高慢で尊大な俺様。スポーツも勉強も何でもでき、大して努力もせずに誰よりもできてしまう人間。そういう恵まれた人は決して多くはないが、確かにいる。たいていはみんなの尊敬の的となるのだが、孝太郎のように他人のミスを許さず、平気で人を見下す人間は結局、自分が痛い目を見ることになる。みんなに拒絶され、味方がいなくなり、ついには自分の居場所がなくなる。確かに、能力があって、何でもできる人には、コツコツ努力している人の気持ちは分からないのかもしれない。自分が簡単にできるから、できない人の立場で考えること自体が難しいのかもしれない。

私の場合、たいていのことはコツコツ努力しなければ成り立たないタイプなのだが、一つだけ人より優位に立てる場面がある。それは「国語」という教科においてだ。幼い頃から読書していたこともあり、国語なら知識量も読解も古文の分野も、誰にも負けない。問題も速く解けて正答率も高い。周りが難しいと言っている場面に出くわすと、（こんなの簡単じゃないか）と心の中で無意識に毒を吐いている。孝太郎のように面と向かって辛辣な言葉こそ発しないけれど、私の中にも人を見下す気持ちはないとは言えない。その一方で、理数が苦手な私は、どんなに努力しても得意な人にはかなわないことを思い知らされているから、古賀という男子の気持ちもよく分かる。人を見下す行為は相手のプライドを確実に踏みにじる。孝太郎がそうだったように周囲からの反発を招くだけでなく、自分自身が孤独に追いやられるということを知らなければならない。

人は記憶があるからこそ、自分を顧みて過去を語り、未来を築いていくことができる。それは常に自らの内面と向き合うことでもあるのだと思う。記憶は単なる情報の蓄積ではないと分かる。人間関係を形成する土台となるものだ。

誰にでも過ちはある。未熟な私たち中学生にはたくさんある。だが、「初期化」という都合の良い機能など人間にはない。たとえ帳消しにしたい過去があったとしても、新たな経験や人間関係を通じて「自分らし

さ」を再構築していくのは可能だということを私は確信した。

対象図書名　キオクがない！

受賞者のひとこと

今回、「最優秀賞」という名誉な賞をいただくことができ、とても光栄に思います。昨年は「大賞」、今年は「最優秀賞」と、大きな賞を二年連続で受賞でき、驚きとうれしさでいっぱいです。

私が読んだ「キオクがない！」という作品は、主人公が記憶喪失をきっかけに、自分とは何者なのかを問い続け、過去の過ちに向き合い、新たな人生を踏み出す決意までが描かれていました。

特に「人間に初期化という機能はない」という言葉が、心に重く響き、とても考えさせられました。この作品をきっかけに、私も自分自身に向き合うことができました。主人公と一緒に、私も日頃の自分の言動を見つめ直せたように思います。

今回も、先生にたくさんのアドバイスをいただきました。毎年、熱心に指導をしてくださる先生に、心から感謝しています。作文を書けば書くほど、悩む場面も増えてきました。これは自分にとっての成長だと思っています。来年は、コンクール参加も最後の年となります。これまでの学びを活かせるよう、頑張ろうと思っています。

ありがとうございました。

中学生の部・最優秀賞（中三）

多様性を認め合って

相田　あづき

私はこの夏休み、たくさんの荷物の中に「かなたのｉｆ」を一冊入れて、オーストラリアの短期留学に参加した。夏休みを利用しての短期留学は二度目なので、前回の経験を生かし、積極的に行動することができた。異文化交流や国際理解を深める毎日。同じ年齢でも考え方や価値観がこんなにも違うのかと驚く。そんな環境の中で読んだこの本は、自分の進路を決定づけるとても大きな意味を持つ一冊になった。

日本では、香奈多のような子は友達ができにくく、むしろみんなから相手にされない。場の空気を読むのも、他人の気持ちを考えるのも苦手な香奈多は、生きづらさを感じていたようだ。特に日本人は、人と違っていると、「変わり者」とみなす。変わり者はとかくのけ者にされがちだ。誰もが距離を置こうとする。学校の先生も、枠からはみ出す子はやりにくいのだろう。実際、そういう子が注意されるのを何度も見てきた。

日本で生まれ育った私だから、こういう状況に何の疑問も持たずに過ごしてきた。自分で言うのも変だけれど、私は素直でおとなしい人間だ。決して枠からはみ出す人間ではない。むしろ先生の言うことを素直に聞き、指示通り行動する。人から反感をもたれる行動などあり得な

い。友達関係も何とか平和に維持できている。相手が自分と違う考え方だったとしても、私は我を張ったりはしない。自分の考えを押し通すことはない。人と対立すること自体を私は避けてきた。

でも二年前、アメリカに短期留学したのを機に、私の価値観が少しずつ変わってきた。人に合わせてばかりいる事が、本当にいいことなのかと。はっきり自己主張するアメリカの中学生に大いに刺激を受けた。一つのテーマでディスカッションする時も、みんな熱量が高く、それがとてもカッコよく思えた。人と違って当然という空気が新鮮に思えた。今回の留学は、その空気を楽しむ自分がいた。海外に行くとつくづく思う。この物語のように住む世界は一つじゃないと。星の数ほどあって、そこに住む人がそれぞれの物語を紡いでいる。私たちにとって知らない世界はたくさんあると、思い知らされる。

この夏、香奈多を通して、「自分らしく」生きることが大切だという気持ちが一層強くなった。統計によると、日本人の子供は自己肯定感が低いという。私たちは皆、周囲との関係性の中で自分の存在を認識していく。学校という集団生活の場では、香奈多のように個性が際立つ生徒はどうしても浮いてしまう。現に香奈多は、常に自己否定ばかりしていた。日本の場合、どうしても「みんなと同じ」であることが安心に繋がるので、「みんなと違う」となれば、心理的に大きな負担となるのだろう。

でも私は香奈多の事を知れば知るほど、他の人が持っていない才能に気づいた。創造力や探究心に富んでいる。自分と似た価値観を持った瑚子ちゃんと出会ったのは、必然だったように思える。思い浮かんだことを言葉にするのも才能だ。香奈多の空想は泉が湧き出すように溢れて止まらない。空想を膨らませる時間は、聞いているだけでとても楽しい。私まで心が解き放たれるような気持ちになる。香奈多にとって「虹のしずく」は瑚子ちゃんだったように、私にとっても香奈多に出会えたことはとても幸運なことだった。

今回の留学でより強く感じたのは、多様性を認める空気がごく自然にあるということだ。現地の学校に通ってみて、中学生が各自の「個性」をむしろ堂々とアピールしていることに気づいた。日本だけにいたらこの発見はなかったのかもしれない。香奈多のようなタイプは、むしろ自分の強みだと思えてくる。

私たちはいろんな可能性を想像できる。選択肢もたくさんある。今回、自分では思いつかないような考え方を香奈多からたくさんもらえた。まさに私にとってイマジナリーフレンドだった。高校の進路をずっと迷っていたが、今回の留学と香奈多との出会いが、私の背中を押してくれた。詰め込み型の学習で点数や順位だけで評価される日本の環境ではなく、やはり海外に留学することを選ぼうと思う。自分の意思で別の世界にアクセスし、異文化の中で生活することで、もっと自分の視野を広げたいと思う。人間関係においても国籍や文化を超えた友情が生まれる可能性は大きいと思う。香奈多にとって瑚子ちゃんだけではなく、私も良き理解者であり続けたい。私も「共感力」という点では負けていないと思うから。

香奈多に出会って、まだ知らない世界を知りたいと思う気持ちが一層強くなってきた。今選ぶべき選択肢を選び、私は私の物語をこれからしっかりと紡いでいこうと決心した。

対象図書名　かなたのif

受賞者のひとこと

小学二年生から毎年作文を書き続け、中三の私にとって、今回がついに最後のコンクール参加となりました。締めくくりともいえる今回だけに、これまで以上に気を引き締めて書き上げました。

今年は、夏休みすべてを短期留学のためオーストラリアで過ごしていたので、課題図書を持って行き、むこうで読書をし、作文を書きました。毎日、英語に囲まれた生活の中で「かなたの if」のページをめくる時間が唯一、日本語に触れる時間であり、心安らぐ時間でもありました。期間中、様々なスケジュールに追われながらも、絶対作文を仕上げるんだと強い気持ちで臨みました。

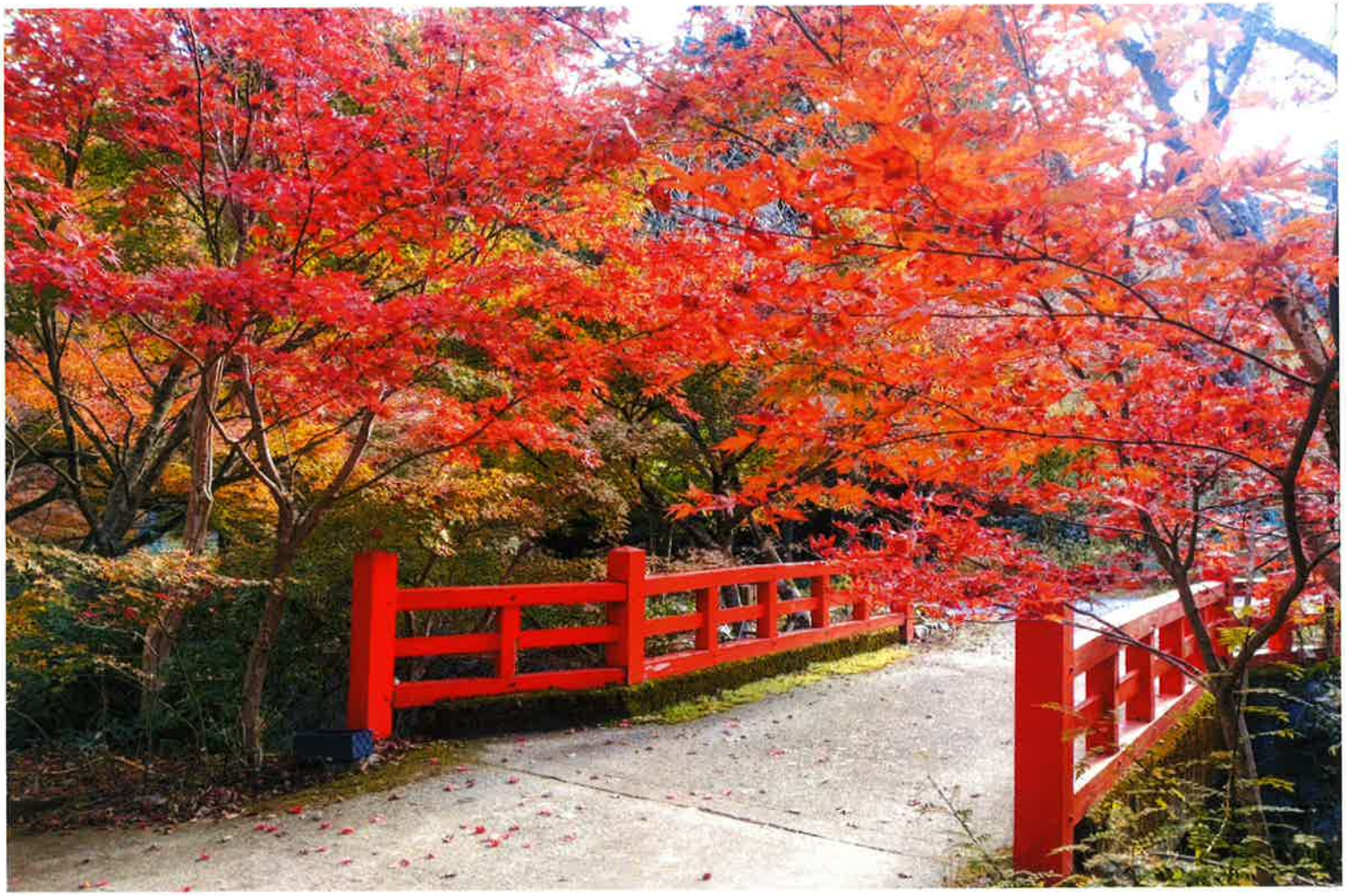
「どんなに大変でも最後までベストを尽くすべし！」――力強い言葉で励ましてくださった先生に心から感謝しています。おかげで「最優秀賞」という名誉ある賞を四年連続でいただくことができ、嬉しさと感謝の気持ちでいっぱいです。

これまで大きな賞をいただけたことはもちろん、毎年このコンクールに参加できたこと、作文を仕上げるために大いに悩み考えたこと、作文を書く楽しさを実感できたこと、すべてが私にとっては宝物といえる時間です。入塾以来、先生の変わらぬ熱いご指導のもと、数え切れないほどの学びがありました。このかけがえのない学びを携えて、高校でも様々な場面で頑張っていきます。

ありがとうございました。

第35回（令和7年度）全国読書作文コンクール

優秀作品集

令和7年10月　発行

発　行　公益社団法人全国学習塾協会
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-39-2
TEL 03-6915-2293 FAX 03-6915-2294
E-mail info@jja.or.jp